

日本作業科学研究会ニュースー作ら， さくらー第 13 号



発行年月日 2013 年 3 月 6 日
発行者 日本作業科学研究会広報係
ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

未知なる世界に気づくこと

副会長 西方浩一

先日，とある研究会に参加し，文化人類学者である波平先生とお会いする機会を得ました。そこで紹介された『波平恵美子著：「生きる力をさがす旅」子ども世界の文化人類学』を読みました。波平先生がこの本を執筆なさったのは神戸の少年による事件があった頃で，きっかけは，子どもたちに「今いる世界だけが世界ではないのだよ。あなたが見ている世界だけが世界ではないのだよ。」と伝えたいと思ったからだそうです。子どもの世界は，大人から見るととても単純で簡単な世界と思われてしまうが，実はそうではなく，子どもも複雑な人間関係の中において，その子どもがいる世界を教えられるのは子ども自身であると書かれていました。また，子どもの世界を大人がわかりづらいということだけでなく，異なる体験をしている人は，同じ時代，同じ国に住んでいようと「世界」を違ったように見て，自分の生きている「世界」に慣れてしまうと，別の「世界」がどんなふうに見えるのかを理解するのが難しくなるそうです。文化人類学は，そのような別の「世界」がどのように見えているのかを探る学問であるとのことでした。様々な人がいて行ってきた経験が異なれば，見えている世界は同じではなく，他者の世界を理解することは簡単ではないのだと気づかされました。

作業科学は，文化人類学や社会学など他の学問領域の手法を用いて発展してきた経緯があります。人々の暮らしや営みの中で行う活

動を作業と捉え，様々な状況にいる人々の「世界」について，作業を用いて表し新たな見方や視点を作る学問とも考えられます。新たな見方や視点を知ることは，その「世界」に居る人たちの理解を助け，学んだ人たちには今までと異なった行動や発想を作るきっかけになると思います。

昨年から日本作業科学研究会では，年に一回のセミナーとは別に，研修会を開催するようになりました。昨年実施した「実践につながる研修会」では，定員 50 名を予定していましたが，瞬く間に定員に達しキャンセル待ちまで必要な状況となりました。会員非会員を問わず多くの方が，作業科学について知りたいと思い，新たな見方を学び実践を見直したいと思っているのだと感じました。今後も，皆様の新たな行動や発想のきっかけになれるよう研修会等を企画していきたいと思います。

今年は，福島で作業科学セミナーが開催されます。多くの方が参加し，様々な「世界」に触れ新たな見方が生まれることを願っています。

第 13 号は福島
H25.11.30-12.1

セミナー実行委員長よりの御誘い
財団法人太田総合病院附属太田熱海病院
齋藤 佑樹

平成 25 年 11 月 30 日と 12 月 1 日の二日間、第 17 回作業科学セミナーが福島県で開催されます。今回のセミナーのテーマは、Message from Occupational science（作業科学からのメッセージ）です。

基調講演には、ヘレン・ポラタイコ先生をお迎えします。また、佐藤剛記念講演には、齋藤さわ子先生、特別講演には東日本大震災後日本初の仮設老健を立ち上げた木田佳和先生をお迎えすることが決まりました。

現在、ワークショップの企画や福島県独自の企画などについても、実行委員を中心に話し合いを進めております。演題発表については、研究・実践ともに発表枠をたくさん確保しましたので、ぜひともこの機会に日頃の研鑽の成果を発表してください。

セミナー会場は、震災前と放射線量が殆ど変わらない磐梯熱海温泉に位置する「郡山ユラックス熱海」です。会場周辺には沢山の温泉宿があります。大河ドラマ「八重の桜」の舞台である会津若松や猪苗代湖など、観光名所もたくさんあります。ぜひセミナーと同様に、磐梯熱海の温泉や福島の名所を楽しんでいただければと思います。セミナーの詳細は、間もなくホームページにアップできる予定です。実行委員一同、沢山の御参加をお待ちしております。

研修会報告

日本作業科学研究会として初めての研修会「作業科学の知識を実践に生かす」研修会が無事終了したことをご報告いたします。お二人の参加者より感想文をいただきました。本年も開催したいと担当班員皆で話しております。その際はぜひ皆様もご参加ください。（西野）

実践につなげる研修会に参加して
自治医科大学附属病院
村上知征

今回、実践につなげる研修会に参加し、作業科学、作業に焦点を当てた実践を学ぶ機会を得た。またワークショップを通して、講師とのディスカッション、自己実践の振り返り、振り返りの内容を参加者と共有することができ、一日を通して私自身とても貴重な時間を過ごすことができた。

作業科学については港先生から、作業に焦点を当てた実践については島谷先生、齋藤先生、西上先生から講義をして頂いた。

作業科学については、作業の形態、機能、意味を研究し、作業科学で得られた知識を介入の焦点に当てていくことができるということ等を学んだ。また、得られた知識から方法論が発展すること、トップダウンの視点が見えてくることなどを知ることができた。

作業に焦点を当てた実践では、研究の結果を実践に生かした支援、作業科学を勉強したことのできた支援、作業的公正を導くための支援を紹介して頂いた。作業の視点からクライアントを見ていくことの重要性を感じることができた。そしてディスカッションを通して、インテーク面接の重要性やクライアントに現状を知ってもらい、画一的な作業を変化させていくといったことを知り、講義内容をより深めていくことができたと思った。中でも実際の作業を用いて作業療法を行うことの重要性や、クライアントと何度も話し合い、想いを重ねていったプロセスはとても印象に残った。

実践の振り返り、振り返りの共有では、自分自身の改善点・今後どうすべきかを意識することができた。さらに、参加者からアドバイスを頂くことができ、他施設の情報を得ることもでき、とても勉強になった。急性期病院であっても、クライアントの人生物語を理

解し、したい作業に対して作業療法士の視点を持って支援していくことは非常に重要だと感じた。

今回の研修を通して、作業療法の魅力を改めて感じる事ができた。今後も、作業科学の知識を深めながら、作業に焦点を当てた実践をしていけるように努力していきたいと思えます。

**「作業科学の知識を実践につなげる：
作業科学と作業療法の架け橋」研修会感想**

**関西福祉科学大学
横井賀津志**

研修会の感想を述べる機会をいただき感謝するとともに、十分な表現はできませんが筆を進める自分に満足しております。なぜなら、私にとって感じたことを文字に残すことが意味ある作業のひとつであるからです。実のところ、私が作業科学に出会ったのは数年前です。作業療法士として一步を踏み出した 24 年前を思い出し、初心に戻った気持ちで種々の作業科学研修会に参加しています。数年前まで作業療法の核が何なのか理解に苦しみながら実践していましたが、作業科学に出会った今、作業療法の核は作業であることに確信を持っています。

今回の研修会では、港美雪先生による「作業療法士の挑戦を支える作業科学」を皮切りに、島谷千晴先生、齋藤佑樹先生、西上忠臣先生による「作業に焦点を当てた実践報告」、そして実践報告された 3 名の講師との直接討論会、最後に参加者同士のワークショップと盛りだくさんの内容でした。作業科学の知識と実践、参加者の確認そして参加者自身の目標設定という流れでしたので非常に理解しやすい内容でした。

まず、港先生から作業科学の概略、作業の意味、そして先行研究の成果を基に作業療法では評価が作業、目標が作業、そして介入が

作業というプロセスを踏むことの大切さを学びました。

次に、実践報告では島谷先生より、自身の研究成果と先行研究から新たな介入プログラムを見出し、自分らしく生活していくことに影響を与える作業に関する自己分析を深め、退院後の生活を自ら構築していくことを目的とした実践報告があり、研究と実践のつながりを実感しました。齋藤先生は、院内でのカンファレンスの模様をまるでライブのように再現され、その人にとって大切な作業の意味を作業療法士の発言内容から垣間見ることができました。西上先生からは作業剥奪の状態であった症例に対して、構造的要因や背景要因を調整することで作業的公正を導くことができたプロセスを紹介いただいた。私にとって「作業剥奪」、「作業的公正」という言葉は不慣れな表現でありましたが、症例を通して分かりやすく説明いただきました。

実践報告直後に開催された 3 名の先生方との討論会では、講演内容に対する質問が途切れることなく、時間が超過してしまう程でした。作業への想いを直接聴くことができ、講演中とは異なり講師の方々との距離が近くなりました。研修会の企画に感謝いたします。

最終課題は、参加者同士のワークショップでした。精神障害領域と身体障害領域そして急性期から生活期まで幅広い職域で働く作業療法士と教員が小グループを結成し、臨床と教育の現状を伝えあい、作業に焦点を当てるための策を練りました。我がグループでは急性期でできる作業の提案や教育内容自体を変える必要があるなど活発な意見交換ができました。そして、全ての参加者が、学んだ作業科学の知識を基にして、明日からの実践に活かすための具体策を提示して持ち帰りました。作業科学と作業療法の架け橋の準備ができたと思います。現在、私も実習先の先生方と作業科学の勉強会を開始するという架け橋がで

きました。

講師の先生方，研修会を準備いただいた研究会の皆様，そして参加者の皆様，本当にありがとうございました。今でもワークショップの熱い討論の余韻が残っています。余韻が残るということも，作業のひとつの意味だと感じました。

こんな勉強会しています(^^)

札幌での作業科学セミナーのレセプションで各地の勉強会が紹介されていました。勉強会の情報をほしいと聞くことも多いので，今回は 2 つの勉強会を御紹介します。ぜひ次号に自分の勉強会も紹介したいという方々からのご連絡をお待ちしております。

関東作業研究会の紹介

北原リハビリテーション病院
島谷千春

「作業についての研究テーマを持っているが，有識者からの助言がほしい」「臨床の疑問について研究を通して形にしたい」など，作業に関する研究を進めていくためお互いにサポートし合えるような環境を作りたい・・・そんな信念のもと，発足したのが，関東作業研究会です。発起人は，帝京科学大学の近藤知子さん，文京学院大学の西方浩一さん，東京都練馬区役所の西方佳子さん，そして私，北原リハビリテーション病院の島谷千春で，2～3 ヶ月に 1 回のペースで行なっており，一回あたりの参加者は 10～12 名程度です。作業科学について持っている知識の程度には，それぞれ多少違いがありますが，基本的には，作業について研究したい人が，発表や論文執筆に向けてテーマを考えたり，研究法や分析方法を吟味しあったりするといった形で進めています。誰かが講義をする・・・という受身的な会ではなく，それぞれのテーマについて，一緒に深めていくような，ピアグループ

の形態をとっています。

また，定期的な研究会とは別に，「作業についての知識を広めよう」と，昨年末には，オープンセミナーを実施したところ，関東近県を中心に，遠くは宮城県から 80 名の方々が参加して下さいました。参加者の半数以上が一度は作業科学について学んだ事がある方で，作業の知識を一層深めたいと思っておられる方がかなりの数に上ることが明らかになりました。中には，初めて作業科学について知ったという理学療法士，看護師，鍼灸士の方もおられましたが，参加者のほぼ全員が，このように作業について学べる機会を継続して持つことを希望されていました。今後も，定期的な研究会を通して自身たちの知識を深めるとともに，オープンセミナーなどを通して作業の知識・作業科学の啓発を行なっていくことの両輪で，研究会を継続していきたいと考えています。

愛知県作業科学勉強会の歩み

偕行会リハビリテーション病院
加藤奈美

愛知県作業科学勉強会を立ち上げ約 1 年半になります。始めは第 15 回作業科学セミナーで出会った 4 人（堀部，磯貝，倉田，加藤）と細々とやっていましたが，昨年 4 月からは参加者を増やし，少しずつ規模を拡大してきました。愛知県は作業科学の認知度が低いように感じます。私たちは作業や作業科学を学ぶことの大切さを多くの人に知ってほしい，クライアントの作業をもっと見てほしい，という思いから勉強会を立ち上げました。勉強会の内容は文献の読み合わせや作業科学セミナーの伝達，自己の作業を振り返るなどさまざまです。できるだけ参加者の思いや考えが聞けるように，グループディスカッションを取り入れ，意見交換がしやすい雰囲気作りを心がけています。

勉強会事務局を務めている私自身，まだまだ知識不足で学ばなくてはならないことが多く，日々悩むこともあります。そんな時，勉強会でいろんな人の意見や考え方を聞くと，気付かされることはたくさんあり，私にとってよい学びの場となっています。勉強会の企画について，どのように進めればよいか毎回試行錯誤していますが，それもまた楽しみでもあり私にとってよい作業な気がします。今後は2月に第1回愛知県作業科学講習会を行い，作業のとらえ方や実践へのつなげ方について伝えていきたいと思っています。また勉強会についての実践報告や勉強会で得られた知識をもとに実践した事例報告を「愛知県作業療法学会」で行う予定です。さらに研究テーマを見つけ研究にも挑戦し，作業科学をどのように実践に繋げるかを探求していきたいと考えています。少しでも作業科学に興味がある方，また自分の作業療法に悩んでいる方，一緒に作業科学を学んでみませんか。毎月第4水曜日の19:00～愛知医療短期大学で開催していますので，一度顔を出してみてください。

シリーズ **作業を考える@東北**

震災から2年が経とうとしています。あの時，東北から離れた地でも不安にさいなまれた人たちがたくさんいました。3月11日を境に作業の構造が変わった人もたくさんいます。いつもと同じように，人と比較せずに，深いメッセージを書いてくださった安達さんありがとうございます。あの時の経験を語り合い，忘れることなく3月11日を過ごそうと思います。



震災時、作業がもたらしたもの

宮城県立精神医療センター

安達 健朗

2011年3月11日，私は前職である岩沼市の南浜中央病院で被災した。地震発生から約1時間後，当院に津波が押し寄せ，1階部分が全損。陸の孤島と化した当院には患者，職員，患者家族等約300人が取り残され，全員が救助されるまで5日を要した。

震災時，私は作業療法士として行ったことはほとんどなかった。医者や看護師が患者の治療や処置をしている中，同じ医療従事者でありながら何もすることができず，無力さを感じた。

私は，主に瓦礫撤去作業を行った。瓦礫をかき分け食料を発見したときの喜びや，道路を遮っていた大木，車を退かしたときの達成感は今でも忘れられない。作業を進めていくにつれ不安は紛れ，微かな希望が持てた。そして，今自分がしている作業が「生きること」に直結していると思うと力が漲った。自らの作業体験を通して，ひとが生活を取り戻すために作業を用いるという作業療法の原点に触れられたような気がする。自分で自分を作業療法しているような感覚だった。この5日間で行った作業は究極の作業療法だったと思う。

唯一作業療法士として取り組んだことは体操の指導である。毎朝患者，職員全員で実施した。職員の掛け声やなじみのある体操の時間だけはいつもと変わらぬ日常風景で，今置かれている悲惨な状況を忘れさせてくれるものであった。患者もこの時ばかりは不思議と不穏等なく，笑顔で取り組んでいる方もいた。

このように，私は震災時，「OTとして何ができるか？」と考える余裕もなく，ただただがむしゃらに自分のできる作業に必死になっていた。今振り返ってみるともっとOTの専門性を生かしたことができたのではと思うこともある。しかし，このような災害時には職

種にとらわれず，他者と比較することなく個人レベルで自分にできることを行うことが大切だと思う。そして，患者に対しては「いつもどおり」が安心感に繋がり，いつもと変わらない対応や環境作り，そして私たち自身が希望を持って関わることで，患者の不安を少しでも軽くし，希望をもたらすと感じた。

次頁に

**研修会「作業科学にまつわる
研究法」のお知らせを掲載し
ています！**

皆さんへのお知らせ

機関紙フリーダウンロード決定！

機関誌「作業科学研究」を

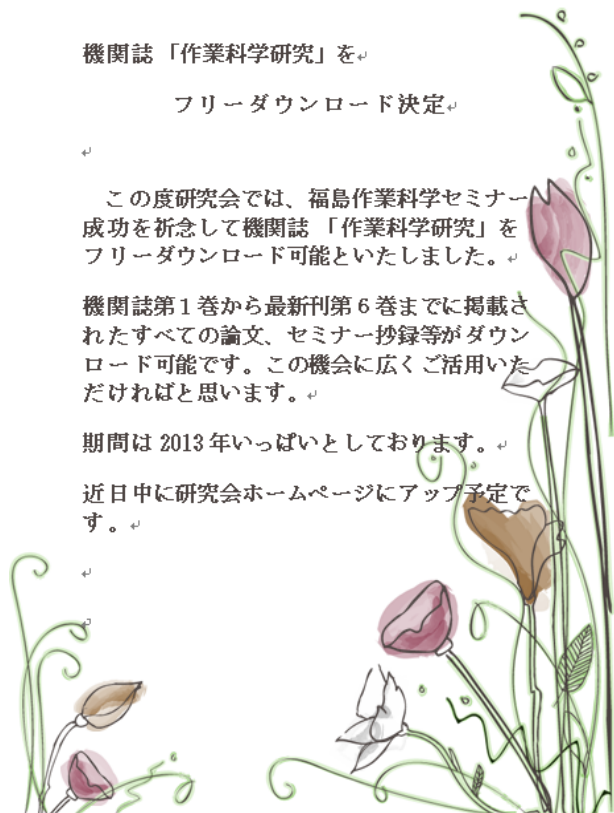
フリーダウンロード決定

この度研究会では、福島作業科学セミナー成功を祈念して機関誌「作業科学研究」をフリーダウンロード可能といたしました。

機関誌第1巻から最新刊第6巻までに掲載されたすべての論文、セミナー抄録等がダウンロード可能です。この機会に広くご活用いただければと思います。

期間は2013年いっぱいとしております。

近日中に研究会ホームページにアップ予定です。



編集者からのお知らせ

お知らせなど，このニュースに掲載したい記事がある会員は，西野歩 nishino@sigg.ac.jp まで，お送りください。ニュース発行は年2回の予定です。

担当理事 西野 歩

作業科学にまつわる研究法

作業科学で行われる研究について知り，その進め方などに関する理解を深めることを目的にセミナー形式の研修会を開催します。

1. 日 時：2013 年 5 月 18 日（土）13:00～17:30（12:30 受付），19 日（日）9:00～12:00

2. 会 場：愛知医療学院短期大学（愛知県清須市一場 519 番地）

3. プログラム

第 I 部：作業科学研究のための基礎知識（18 日 13:00～17:30）

講師：近藤知子（帝京科学大学），酒井ひとみ（関西福祉科学大学）

ディスカッション

第 II 部：作業科学研究の理解（19 日 9:00～12:00）

講師：港美雪（愛知医療学院短期大学）

ワークショップ

4. 会 費

会員：8000 円，非会員：10000 円 会場にてお支払いください。

5. 定 員：30 人（先着順受付，20 人以上で開催）

6. 申込み方法

申込み用メールアドレス：osstudy@jssso.jp

参加ご希望の方は，上記メールアドレス宛に

1) 氏名 2) 所属と所在都道府県 3) 連絡先メールアドレス 4) 会員，非会員
をご記入の上，送信してください。参加受付後，こちらから返信いたします。